

かゝるすき事を去給事と誹りあへり、つかはし、人は、夜晝待給ふに、年越るまで音もせず、心もとながりて、いと忍て、たゞ舍人二人召付として、やつれ給ひ難波の邊におはしまして、問給ふ事は、太友の大納言どの、人や、ふねに乗て、龍ころして、其首の玉とれるとや聞と、とはするに、舟人こたへていはく、あやしき事哉とわらひて、さるわざするふねもなしと答るに、おぢなき事する船人にもある哉、得まらでかく云とおぼして、我ゆみの力は、龍あらば、ふといころして、首の玉はとりてん、をそくくるやつばらをまたじとの給ひて、船にのりて、海ごとによりき給ふに、○中はやき風吹て、世界くらがりて、船を吹もてありく、いづれのかたともまらさず、船を海中にまかり入ぬべく吹まはして、波は船に打かけつ、まき入神はおちかゝるやうにひらめきかゝるに、○中ははや神にいのり給へといふ、よき事也とて、梶とりの御神きこしめせ、をとなく心おさなく、龍をころさむと思ひけり、今より後は、けのすぢ一すぢをだにうごかしたてまつらじと、よごとをばなちて、たちゐなく、よばひ給ふこと、千度ばかり申給ふけにやあらん、漸々神なりやみ、すこし光て風は猶はやく吹、梶取のいはく、是はたつのまわざにこそありけれ、此吹風○中三四日ふきて、吹かへしよせたり、濱をみれば、播磨のあかしの濱なり、○中船にある男ども、國につきたれども、國の司まうでとぶらふにも、えおきあがり給はで、ふなぞこに臥たまへり、○中いかでか聞けん、つかはし、男どもまいりて申やう、龍のくびの玉をえとらざりしかば、なむ殿へも、えまいらざりし、玉の取がたかりし事をまじ給へば、なんかむだうあらじとて、參つると申、大納言起出のたまはく、なむぢらよくもてこそなりぬ、たつはなる神の。るいにてこそ有けれ、かくや姫てふおほ盗人のやつが、人をころさむとする也、けり、家のあたりだに、今はとをらじ、男ども、なありきそとて、家に少残りたりける物どもは、龍の玉をとらぬものどもにたびつ、○下

〔今昔物語、二十四〕忠明治値龍者語第十一